三題噺『・特売日　・ピストル　・公園』

人気のない夜の公園で、地面にへたり込みながら怯える中年の男が一人。
そしてその男の視線の先には、ピストルを真っ直ぐと構えた青年の姿があった。
銃口を向けられている男は、顔を恐怖に染め上げ、口は魚のようにハクハクと動き、声にならない息が溢れる。
青年は少しも表情を崩すことなく、男に向かって引き金を引く――その瞬間、青年のポケットの中でスマホが震えた。
引き金にかけた指の力を少し緩め、青年はポケットの中からスマホを取り出す。
画面に表示されていたのは、恋人である女性の名前。
青年は目の前の男から視線を逸らすことなく、画面をスライドして通話をとった。
「もしもし？」
先ほどの雰囲気とは劇的に変わった恋人へ向ける優しく甘い青年のその声に、怯えていた男の顔が驚きで歪んだ。
「あ、もしもし？　まだお仕事中？」
「うん。でもあともう少しで終わるところだよ」
「あ、ほんと？　わかった。じゃあご飯の準備して待ってるね。今日は特売日でたくさん買っちゃったから、いつもより豪勢だよ～」
「そうなの？　それは楽しみだな」
「ふふ、じゃあ早く帰ってきてね」
「うん、わかった――」
そう答えた瞬間、青年は何の前触れもなくいきなり引き金を引き、目の前にいた男は声も上げずに頭から後ろへと倒れ込んだ。
大きな銃声が響き渡ることはなかった。ただ、サンプレッサー付きのピストルが、彼の手の中で軽い音を立てただけ。
彼は構えていたピストルを下ろすと、電話の向こうの恋人に向かって優しく微笑んだ。
「――すぐに帰るよ」